

shame, to ask you to forgive me.' (pp. 210-11)。

地下室を持つ建物であるJocelinは、人に触れる手に“blight”を持つ植物でもある。そして垂直に伸びた筈の尖塔と大聖堂は絡みつく蔓や枝を持つ植物で、暗い地中に根をはわせているように、人が埋められた穴を持っている。作者Goldingは‘*It’s like the appletree !*’ (p. 223) とJocelinに花咲くりんごの樹の幻を臨終の時に見させている。物質を超える精神の優位を想像したくなる夢を今一度垣間見せたのだろうか。暗い地中に根を持つからこそ香りよい花を咲かせることができると暗示したかったのであろうか。Kevin McCarronはJocelinが最後に学んだことをこうまとめている——“Jocelin realizes that, like the spire itself, life is a miracle, rooted deeply in both innocence and guilt, in beauty and in blood.”¹¹⁾

註

- 1) *The Spire*, Faber and Faber, Paper Covered Edition, 1970, p. 210. 以下この作品からの引用はこの版により、引用頁数は本文中に示す。
- 2) マグダ・レヴェツ・アレクサンダー著（池井望訳）「塔の思想 ヨーロッパ文明の鍵」, 河出書房新社, 昭和55年, 12-13頁。
- 3) Leighton Hodson, *William Golding*, Edinburgh : Oliver and Boyd, 1969, p. 89.
- 4) David Skilton, “On *The Spire*”, *William Golding : Novels, 1954-67*, ed. Norman Page, Macmillan, 1985, p. 161.
- 5) *Ibid.*, p. 155.
- 6) Mark Kinkead-Weekes and Ian Gregor, *William Golding : A Critical Study*, Faber and Faber, 1984, p. 204.
- 7) 死の床で背中の劇痛に苦しむJocelinは痛みを和らげる薬を飲されるが、それは“a bitter stuff to drink, poppy perhaps” (p. 217) と言及される。このように同じ語やイメージを用いることによって、大聖堂全体と自分が一体であると見なしたい彼の願望が尖塔完成で充足させられたものの、同時にそれは死という彼の崩壊と不可分の関係にあることを読者に納得させようとする綿密な作者の計算がうかがえる。
- 8) この詩行はO. U. P. とC. U. P. とが共同出版した*The Revised English Bible* (1989) によった。
- 9) Mall Mölder Stalhammar, *Imagery in Golding’s The Spire*, Sweden : Acta Universitatis Gothoburgensis, 1977, p. 74.
- 10) “The Spire,” *The Critical Quarterly*, Vol. 9, No. 1 (Spring 1967), p. 72.
- 11) *William Golding*, Northcoat House, 1994, p. 24.

began. A single green shoot at first, then clinging tendrils, then branches, then at last a riotous confusion—I didn't know what would be required of me, even when I offered myself. Then later, he and she——' (p. 168)

“complications”という語は、Jocelinの意識に性的連想が起った時に用いられた“confusion”を想起させるものだ。更に“vision”には「芽」という植物のイメージが付与され、そこから伸び絡む蔓や枝は、性的な妄想とそれに対する警戒、固定観念と化した使命感、夢を実現させたくて工夫する頭と心による正当化、といった人間の複雑な心の働きの比喻ともなっている。そしてそれは、JocelinがGoodyとRogerの接近を見、Rachelに性的な冗談を言われて狼狽し祭壇で祈った時に味った恐れのイメージと重なっている——“a horror of the burgeoning evil thing, from birth to senility with its ghastly and complex strength between” (pp. 62-3)。天へ向って伸びていく尖塔の“vision”の実現は、自分の肉なる闇の中で下へ下へと地中に根を伸ばした欲望と絡んでいることをJocelinは学んだのである。

植物と塔とを同一視したイメージは、審問の後、彼を見守るAdam神父への発言にも見られる。Jocelinは、自分が「選ばれた」“spiritual man”だと思って塔の建築をすべてに優先させたが、その工事の進展を植物の発育になぞらえ、‘Growth of a plant with strange flowers and fruit, complex, twining, engulfing, destroying, strangling’ (p. 194) と口にする。その途端彼にその植物が見えてくる。

And immediately the plant was visible to him, a riot of foliage and flowers and overripe, bursting fruit. There was no tracing its complications back to the root, no disentangling the anguished faces that cried out from among it ; so he cried out himself, and then was silent. (p. 194)

地中から叫ぶ人の顔にPangallやGoodyがあった筈である。許しを乞いにRogerを訪ねたJocelinは「偉大な仕事」を行っていると思ったが‘all I was doing was bringing ruin and breeding hate’ (p. 209) と述べ、自分が汚い闇を持った人間だとわかったと告白する——‘I'm a building with a vast cellarage where the rats live ; and there's some kind of blight on my hands. I injure everyone I touch, particularly those I love. Now I've come in pain and

の“kneeling image”にこうつぶやくのである。

The kneeling image cleared his head. Well Jocelin, he said soundlessly to the kneeling image; Well Jocelin, this is where we have come. It began when we were knocked down, I think. It was when the earth moved, more or less. We can remember what happened since then, but what happened before is some sort of dream. Except for the vision. (p. 155)

この時Jocelinはまだ自分の“vision”を“real”なものとして信じていて、強引にこの高さまで完成させた尖塔の工事を正当なものに見なすことができたのである。そしてこの高い所から“devilworshippers”がともした丘の上の“the fires of Midsummer Night”を目にした時に、職人たちは“good men”だったと自分にいいきかせる — ‘It’s another lesson. The leason for this height’ (p. 155)。更に死んだGoodyのことを思い出して涙する — “he wept bitterly without knowing what he wept for unless it was the sins of the world” (p. 156)。まだ自分自身の“sins”を学んではいない。そして彼の“mind”はBatheshebaを手に入れるためにその夫Uriahを死へ追いやったがために聖なる神殿を造営することを許されなかったDavid王のことを考える。その時彼の視線は梯子を追い、天井を追い、聖堂中心部の塞がれた“pit”にそそがれる。そこにPangallが人身御供として生き埋めになっていたことをはっきり意識する — “at the crossways, the replaced paving stones were hot to his feet with all the fires of hell.” (p. 157)。“spire”建設という夢を実現するために大切な人たちを死に追いやったJocelinは自分が「悪魔」と同じく地獄の業火の罰を受けなければいけなくなったことを知ったのである。神の“vision”に忠実だった筈の自分自身が、Davidと同じく、「汚れ」を持ち込んだことを学んだのだ。

Jocelinにとって尖塔を建立するという“vision”は単純に実現できるように思っていた。そのことは冒頭の彼の喜びと自信にうかがえる。神さながらに意志と権威をふるえば難しい筈ではなかった。彼を審問に来た“the Visitor”に対し、こう述べている。

‘I had a vision you see, a clear and explicit vision. It was so simple ! It was to be my work. I was chosen for it. But hen the complications

この出来事以後Jocelinの祈りに変化が起る。目の前にGoodyの“red, knotted hair”がちらついて追い払えず祈りに集中できない。身重の彼女の歩く姿を見る時、抑えていた性的欲望が頭をもたげてくるのを彼は意識し、2組の夫婦生活を考えてしまう——“he knew in himself a mixture of dear love and prurience . . . it was as if the words in the swallow’s nest were tugging him out of security into a chaos, where the four of them performed in some unholy marriage” (p. 127)。彼女を「救う」ために彼女に会わねばと思いながらも、“the prurience in him”を「らい病」のように感じているJocelinは彼女を前にして自制できる自信をなくしている。この心的変化は、上へと積み上げられ高くなっていく塔に対する思いにも影響していく——“This is nothing like my model . . . nothing like my vision ; but we do what we can. Perhaps it’s a diagram of the folly they don’t know.” (p. 128)。塔は“a diagram of prayer”とは思えなくなっているのだ。

Jocelinは、Stilburyの女子修道院にGoodyを引き取って貰うように手筈をとるが彼女は流産で死亡する。しかし一度目覚めた彼の性的幻想は彼女が埋葬された後でも静まることなく、彼女の幻から解放されない。背中をむしばんでいく結核性の病気は天使が尖塔建設の重荷を自分の背に負わせているからだと思っているが、その一方でSatanが“an unruly member” (p. 138) となって彼の腰を襲ってくる。JocelinはRogerと一緒に居ることで、自分に“haunt”するGoodyの幻を追い払おうとするが、Rogerは彼女の死を機に、高い所が恐くなって工事現場へ昇れなくなる。一方Jocelinは好運を持ってくる人として職人たちに歓迎され、高所の工事現場に居ることが多くなる。そして尖塔完成後に行う説教をそろそろ考えねばならない高さ、尖塔は400フィートに達する。しかし尖塔を支える4本の柱は“bending”し始める。このことは彼を精神的に支える4本の柱と見なしてきた2組の夫婦が彼の“vision”と“will”の下で崩壊したことを表しており、それはやがて“he was like a building about to fall” (p. 222) と記される彼自身を予告するものである。

すべてを犠牲にして“spire”建立を成し遂げようとするJocelinを、棟梁のRogerは‘The devil himself’ (p. 123) と評した。また死にかけているGoodyに何か話しかけようとして近づいた時に彼女が叫んで逃げ出しのを自分に“accuser”を見たからだと言ったとJocelinは言う (p. 137)。この時他者の目に自分の外見の姿がどう映っているのか彼にはよくわかっていなかった。しかし、「鳥たちの王国」である“tower”の上に昇った時、その金属板に映る自分の姿にぎょっとし、一瞬“exorcism”を考える。死神のような外観を呈しているのだ。骨と皮のやせた腕と脚、“beak”のような鼻、皺だらけの顔を見つめるJocelinは自分

III

肝心な時に笑い出すという Rachel の性的な言及に Jocelin が “confusion” を感じたことは既に触れたが、この種の「狼狽」を彼は自分に対する Goody の態度に対して味っている。“pit” を石で埋める騒ぎの日以来 Pangall は姿を消したが、Roger への彼女の熱い視線を知った Jocelin は彼女にことばをかけようとするものの、何を語ってよいかわからぬまま、Pangall は戻ってくるよといいながら、‘And meanwhile — all these years — My child, you are very dear to me’ と口にする、彼女は ‘Not you too !’ とつぶやいて泣きながら立去る (p. 100)。“very dear” に含まれる性愛的表情を彼自身は意識していなかったであろうが Goody は直感的に感じ取ったのである。“confusion” におちいった Jocelin は高い工事現場へ上ることによってこの不可解な状態から逃げようとする——“I must put aside all small things . . . I must climb away from all this confusion ! And with the thought came the high, fretful laugh again. I shall take this burning will of mine up the tower” (p. 100)。性的なことや人間関係はすべて「些細なこと」として無視しようとするのだ。地面から 200 フィート以上もある塔の上にきた Jocelin は ‘Up here we are free of all the confusion!’ (p. 104) と笑い、叫ぶのであるが皮肉にも「些細なこと」がそこまでも追いかけてきている。

この高い所から下の聖堂の中心部にある石で埋めた “pit” の跡を見下した時、あの騒ぎの場面が眼前にうかび Pangall 行方不明の真相の手がかりがあそこにあるのでは、との思いが脳裡をよぎる——“The confusion was in his head again.” (p. 105)。性的なことと同じく、何か彼の良心と絡んでくるものを抑圧しようとする時彼は「狼狽」を感じるのだ。しかしここでも、“it’s the cost ! . . . And I can’t pray for them since my whole life has become one prayer of will, fused, built in. Have mercy. Or teach me.” (p. 105) と真実から目をそらそうとする。だが “peace” と “happiness” を味わせてくれる筈のこの高所にはもう一つ、例の狼狽させるものがあつた。

工事のための道具置場である “the swallow’s nest” (p. 125) で Roger に抱かれた Goody の声を耳にするのである。Jocelin は ‘Oh no, dear God no !’ と口にしながらもこの二人の関係を “The cost of building material” (p. 126) と見なそうとする。しかしこの代償は、彼が抑制してきた性的雑念をかき立て、彼の「地下室」認識をせまってくる。「つばめの巣」からもれる Goody の “moan” は、まるで大聖堂の身廊の “pit bottom” からきこえてくるように思えたのである。

tides of feeling, swirling, pricking, burning — a horror of the burgeoning evil thing, from birth to senility with its ghastly and complex strength between” (pp. 62-3)。ここでJocelinを襲っている“tides”が何なのか具体的に述べられていないが、「芽をふいているいけないもの」への恐れは、先に触れたGoodyとRogerを見た時の“the renewing life”への嫌悪と重なるもので、性的なものであることは確かだ。そしてその夜彼が見た。“a meaningless and hopeless dream”は明らかに性と関係していた。夢で目をさました彼が、嫌悪感をあらわに笞で自分の体を7回打ちつけていることにそのことがうかがえる。

この夢の中にはRachel, Roler, Pangallが出てきて彼を“jeer”するのだが、Goodyの名はない。彼らは、“crucified”された姿であお向けになっているJocelinという「教会」に“spire”がないことを知っていた、と述べられる。Jocelinの性的機能抑圧への含みが隠されている。この直後、Goldingは次のように夢の様子を描いている——“Only Satan himself, rising out of the west, clad in nothing but blazing hair stood over his nave and worked at the building, tormenting him so that he writhed on the marsh in the warm water, and cried out aloud.” (p. 65)。彼を“jeer”する人たちの中にGoodyがいなかったが、このSatanこそが、燃えるような赤い髪をした彼女がJocelinの抑圧の心的作用によって変身したものと解することができる。作品8頁からの引用では大聖堂が人間の体に似ているという方向でこの二つのものの類似が暗示されたが、ここではJocelinの体が聖堂・尖塔に見立ててあり、Jocelinの自己認識への作業が始ったと考えることができよう。そしてその認識にはGoodyへの欲望が反省されなければいけなかった。

最終章の前の11章において、尖塔建立のために精神的に苦しめたRogerから許しを乞うためJocelinは、脊椎を病んでぼろぼろになった肉体を引きずり、汚い溝をはうように前進、町に住むRogerを訪ねる。本通りのその“gutter”を進む彼には人の“legs”しか目に入らない。作者は、彼の目の高さを低くすることによって、傲り・高慢から目をさましつつある彼の精神的変化を表していく。Jocelinは、‘What’s a man’s mind Roger? Is it the whole building, cellarage and all?’と自らの闇を見たことに言及し、更にGoodyをPangallと結婚させた時に寺男が不能であることを「地下室」が知っていたと告白するのである——‘The trouble is, Roger, that the cellarage knew about him — knew he was impotent I mean — and arranged the marriage’ (p. 213)。Jocelinは自分にGoodyへの性的欲望の存在があったことを認めたのであるが、彼にとって性は鬼門であった。

は、Jocelinがやがて意識化することになる自分の内なる「地下室」と相通じる、この「穴」について次のように述べている——“In terms of the physical analogy, it would represent the bowels, the centre of corruption and the darkness of man's heart. Psychologically, too, it is the Id, terrifying in its power to suggest the monstrous passions barely controlled below the surface.”¹⁰⁾ 上記の場面においてJocelinは不能なPangallとGoodyを結婚させた自分自身の欲望という“filth”に気づいていないうえに、自分が両手にしっかり握っている“spire”の模型は“phallic symbol”と意図されているので、この模型に向って‘Fith!’と叫ぶことは強烈なドラマティック・アイロニーである。

大聖堂と尖塔の模型は最初から性的イメージでもっと導入されていたのだ。

The model was like a man lying on his back. The nave was his legs placed together, the transepts on either side were his arms outspread. The choir was his body ; and the Lady Chapel where now the services would be held, was his head. And now also, springing, projecting, bursting, erupting from the heart of the building, there was its crown and majesty, the new spire. (p. 8)

聖なるカテドラルは人間の肉体に見立てられており、中心部にそそり立つ“the new spire”は勃起した陰茎を想起させる。ただJocelinの連想はそこにはないが、既に引用したように、尖塔を建てようとしている自分を医師に見なして“Now I lay a hand on the very body of my church” (p. 13) と教会を体をたとえることができるので無意識のうちに尖塔の性的含みは抑えられていたとみることができよう。Jocelinは“I must remember that the spire isn't everything ! I must do, as far as possible, exactly what I have always done.” (pp. 8-9) と工事開始への喜びを抑制しようとするのだが、人間やミサを犠牲にして尖塔が「すべて」となる。Goodyもそのような“cost”なのである。

Jocelinは彼女とRogerとの接近に何か汚いものを感じ、祈りの時に祭壇の光の“purity”が遠のいたと思うが、彼女が工事に乗り気でないRogerを引き留めてくれるのではないかと(‘She will keep him here.’ p. 64), 2人が近づくのを黙認することになる。彼にとって、PangallとGoody, RogerとRachelのこの二組の夫婦の存在は、彼ら4人を“like four pillars at the crossways of the building” (p. 62) と言及しているように、Jocelinという建物を安定させてくれる筈のものであった。それ故にこの関係に亀裂が生じ始めたのを見たJocelinは神に祈るのであるが天使の慰めはない——“there was no angel; only the

せる——“It [the chisel] sank in, in, through the stone skin, grated and pierced in among the rubble with which the giants who had been on the earth in those days had filled the heart of the pillar.”(p. 188)。柱が“solid”でないとわかった時、彼の“spirit”は“an interior gulf”を落下して行き、彼の“physical body”は石の床の上に崩れ落ち、“a broken snake”のように、背中の痛みのためにのたうちまわる。物の現実が彼の精神を支えたものであることをここでJocelinは学ぶのであるが、尖塔建設の夢がすべてであった彼は見たくない現実から目をそらしていたのだ。RogerとGoodyとが互いに魅かれ合うのを目撃した時もそうであった。

II

神の啓示によって生れたJocelinの“vision”に「汚れ」の影がさすのは、彼女の“innocence”“purity”の維持させたいが故に不能のPangallと結婚させたGoodyが、棟梁のRogerを意識しているのを知った時である。Jocelinは、“the invisible tent”が2人の周りを囲むのを「見た」(saw)のである(p. 57)。この時彼の内部に生じた感情をGoldingは、“an anger rose out of some pit inside Jocelin”(p. 58)と表現している。この場面が描かれる第三章は降り続く雨の描写で始っているが、風が吹かない雨だけの毎日が続く、聖堂中央部に掘られた“pit”が悪臭を放つようになる。そしてこの臭いが“the smell of stale incense and burnt wax”(p. 53)と混じり、ミサを行う僧たちもさすがに嫌な顔を隠せない。聖と俗、あるいは職人たちが異教徒なのでキリスト教と異教との混在の暗示を読み取ってもよいのだろうが、問題はやはり“pit”である。

二人だけの世界を造ろうとしているGoodyとRogerを見てJocelinは‘No !’と叫ぶのだが、その語は“an obscure place of indignation”から発せられた。そして突然彼は、“the renewing life of the world was a filthy thing”と感じ、空気を求めて北の袖廊から外へかけ出す(p. 58)。Jocelinは、性に関連あるものを直感して逃げたのである。この直後に作者は、Rogerの妻RachelをJocelinの前に登場させる。彼女が、Rogerとの間に子供が生れないのは“at the most inappropriate moment she began to laugh”(p. 59)のためだとしやべるのを聞いたJocelinは“confusion”を味わう。両手に持った“spire”の模型に向かって、何と鈍感で無礼な女だと口にし、‘Filth ! Filth !’と叫ぶのである(p. 60)。

ここには工事のための“pit”と人間の心の奥の“pit”が結び付けられ、この小説の大きな特徴である“the interaction between mental and physical reality”⁹⁾を再確認できるのだが、性的な暗示が濃厚である。D. W. Crompton

う物体を支えるのに十分と思っているのだ。

この危ういJocelinの考え方は、物質が集り固まって形を取ったものでないものに堅固なものを読み取って感動する、ひとりよがりなロマンティックな彼の資質に基づくもので、この特徴は工事現場に入った時の彼の描写に描かれている。聖堂内部に入ったJocelinの目には、細かいほこりに満ちた陽光の束は“the most solid thing”に映り、現実の“pillars”と見まちがえてしまいそうになるのである。確かに彼は“how the mind touches all things with law, yet deceives itself as easily as a child” (p. 10) と考え、にこりと自己満足の微笑を浮かべるのであるが、自分の“will”を神のそれと同列化する自信は、実際に基盤が無いことを目にした時、物理的に不可能なことに挑戦しようとする。

120フィートの丸天井で行われている工事の騒音がひどくてLady Chapelでのミサに支障をきたしているという苦情が出たことで、Jocelinはらせん階段を上って工事現場へ昇っていくが、そこで喜びに浸る——“It seemed suddenly to Jocelin that now he loved everybody with ease and delight. He was filled with excitement.... ‘Rejoice, O daughters of Jerusalem !’” (pp. 70-71)。「ゼカリヤ書」(9章9節)からの引用はこの後“See, your king is coming to you, / his cause won, his victory gained”と続いて⁸⁾、キリストの勝利を称えるものであるが、皮肉にもこの精神的、物質的高みから“a black dot”とJocelinに見えた地質調査用の“pit”が、基盤が無いことを露わにする。地表のすぐ下の小石はまるで“grubs”のようにうごめきながら次々へ“pit”の底へと落下して行き、地面がずり動き、Jocelinは“the roof of hell”がせり上ってきた感覚を抱く。Rogerの‘Fill the pit !’の命令で石が投げ込まれ、穴は塞がれる。この時Jocelinは聖歌隊席へ行ってみずき、聖堂を支える4本の柱の内部へ自分の“will”を“thrust”しようとするのである (p. 81)。

たとえ建物が神を称える信仰の象徴だとしても、それは堅固な地盤という物質の上に位置すべきもので、‘the solid earth argues against us’ (p. 85) とRogerは工事中止を訴える。それに対し建築を続行させたいJocelinを支えたのは“will”という精神であった——“now my will has to support a whole world up there ... My will is in the pillars and the high wall. I offered myself ; and I am learning.” (pp. 96-7)。彼は意志の力で塔を支えるという、物を超越する精神性の優位という夢の魅力を学びつつあるのだ。だが同時にそれは、彼の先輩の聖職者たちが建立したこのカテドラルの四本の柱は“solid”であるという信頼の上に築かれている優位性なのであった。“tower”の木に彼自ら“Holy Nail”を打ち込んで尖塔建立の工事が完了した後、Jocelinの像を彫刻した石工の“the dumb man”は、Jocelinの目の前で、のみを柱に打ち込んでみ

my people.... I know them all, know what they are doing and will do, know what they have done. All these years I have gone on, put the place on me like a coat.” (p. 8)。作者はまるで全知全能の神のような気分でいるJocelinの自己満足を明示している。更に作者は、「朝の祈り」が行われているLady Chapelの向うJocelinに、カテドラルのWest Endへの入口の掛け金を上げて入る時に、‘Lift up your heads, O ye Gates !’ (p. 9) と言わせているのである。これは詩篇24の第7の歌 (verse) からの引用で、Jocelinが口にしたことばの後には“and be ye lift up, ye everlasting doors ; and the King of glory shall come in.”が続く。大古から永遠に続く門はシオンの丘の神殿のそれで、Jocelinは聖堂をその神殿に仕立て、自分をその聖所に入っていく神と見立てているのである。

人でも物でも自分の自由になると極め付けている傲慢なJocelinには、船を操る船長のイメージが付与されている (“knowing the security of the stone ship, the security of her crew,” p. 11)。また、偶然Goody, つまり“my daughter in God”がドアから入って来た時、劇の演出家であるかのように, “as if his memory of her had called her in” (p. 11) と述べられている。そして、これから聖堂の本体 (“the very body of my church”) の上に塔を建てようとする自分自身を“Like a surgeon, I take my knife to the stomach drugged with poppy” (p. 13) と言及している。⁷⁾“vision”の実現に昂揚した気分になっているだけでなく、権力を行使する自分に酔っているJocelinは、助祭たちが彼のことを‘proud’ ‘ignorant’ ‘He thinks he is a saint’ と悪口を言っているのを耳にしても自分のことだとは全く気づかない。また職人たちにバカにされたと涙ながらに訴えるPangallに対しても苛立ちを覚えるだけで、これから工事が行われようとして教会の鋸壁の高みへ目を向ける。

神の啓示を体験した自分が精神的にも高い所にいると信じている司祭長Jocelinは、他の人たちが自分に仕えるのは当然と思っている。自分の“vision”を石で「作り上げる」(fashion) 仕事をしている棟梁Rogerは“tool”, “my prisoner for this duty”であり、性的なことを平気で口にするその妻Rachelと共に, “instruments”である。尖塔を増築するのに基盤は大丈夫かと心配するRogerは、彼によれば“blind”であって、基盤である大地という物の重大さをJocelinは軽視している。教会の中央部に“pit”を掘って地質調査をするRogerが ‘I’m looking for gravel. That’s a real foundation, is gravel.’ (p. 39) と発言したのに対し、Jocelinは, ‘You’ll see how I shall thrust you upward by my will. It’s God’s will in this business.’ (p. 40) と答える。神に選ばれたという信念、それを実行に移す意志の強さ、といった精神的なものが、塔とい

品に共通する基本的テーマを“self-understanding”として“all are planned on the progression towards this moment, from complete blindness to illumination”³⁾と述べている通りである。*The Spire*は三人称の語り手をもつが、LokやPincherと同じくJocelinの視点から物事や人物たちが見られている。物語の展開と主人公の視点との関係は、“the development of the novel is totally shaped by Jocelin’s consciousness”⁴⁾と言えるほど密着していて、私たち読者は、彼の自己認識の工程——“Jocelin’s progress from ignorance to enlightenment”⁵⁾——に同時進行の形で付き合うことになる。

I

尖塔完成後、“a consumption of the back and spine” (p. 218) のために死の床にふすJocelinは、自分を見守ってくれるFather Adamに対して、‘I thought I was chosen ; a spiritual man, loving above all ; and given specific work to do.’ (p. 194) とつぶやくが、*The Spire*の冒頭では、この確信にあふれていたJocelinの高笑いとその顔に映るステンドグラスの像とが描かれる。

He was laughing, chin up, and shaking his head. God the Father was exploding in his face with a glory of sunlight through painted glass, a glory that moved with his movements to consume and exalt Abraham and Isaac and then God again. The tears of laughter in his eyes made additional spokes and wheels and rainbows. (p. 7)

ステンドグラスは、神への信仰の証しに愛する独り息子Isaacを殺そうとするAbrahamを神が自由にしてやる場面を描いたものであろうが、“The work of God, the building of the church, may include bloodshed, sacrifice, murder.”⁶⁾と批評で言及されるように、尖塔建設のために寺男のPangallやその妻Goodyらを見殺しにしてしまうJocelinを予告する出だしであることはよく指摘される。だが、いきなりどきりとさせられるのは、始まりの“He was laughing”という文と、同じ過去進行形の構文を持つ次の“God the Father was exploding”という文の並置で、作者はJocelinと「父なる神」とをわざと同列に並べようとしているのではと考えさせられる。

次の頁では「朝の祈り」へ出かけねばと言いながらも、相当に年配の参事会員の後姿に“an arrow of love”を送って、老人の忘れっぽさを愉快そうに想像しひとり悦に入るJocelinの内的独白が見られる——“My place, my house,

*The Spire*におけるJocelinの学び

吉 田 徹 夫

I

William Goldingが1964年に発表した*The Spire*では、各々80フィートの高さの二つの“chamber”からなる“tower”と、外側が“rising cone”の如く見える150フィートの“spire”とが、約2年間にわたる工事で徐々に上へ建てられていく。物語は、この建造物が天へ向って垂直に伸びていくのと並行して、尖塔建立のために神の啓示をうけ「選ばれた」と信じ込んでいる司祭長Jocelinの肉体的及び精神的崩壊、つまり多分結核と思える病にむしばまれて体が衰弱していくのと、彼が自分自身の「ねずみの住む地下室」(cellarage where the rats live)¹⁾を認識していく過程を辿っている。

マグダ・アレクサンダーは塔建築の原型をバベルの塔にみて、天に届き神と肩を並べようとした人間の「不遜」^{ヒュブリス}に触れ、古来「塔を建設しようとする情熱」が高慢なものと考えられたと記しているが²⁾、Jocelinの場合もこの概念の流れに位置している。彼にとって“spire”は‘a diagram of prayer’ (p. 120) であって、この夢を実現するために参事会の反対をねじ伏せ、現場監督である棟梁Rogerの「基盤が弱い」という道理にも耳をかさず、また工事の便宜のために大聖堂でのミサを取りやめるなど、独裁者の如く“authority”を利かせるのである。だがJocelinには、建立を成功させてより高い宗教界の地位を得ようとする野心があるわけではなく、“a forbidden tree”の高い所にのぼって“appalled delight” (p. 101) を感じる男の子のように、神への信仰のために塔を建てるという“vision”を無邪気に信じている。彼の視線は天の方向へ向けられ、建立のために支払う犠牲には目を向けるのを避けるのだが、やがてその視線は周囲に、そして自分の“pit”, “cellarage”へ向けられていく。

Goldingの小説は、*Lord of the Flies*の最後の場面でRalphが“the darkness of man’s heart”を認識して涙することが典型的に示すように、主人公たちが見なかった、あるいは見たくなかった人間の姿、また自我像が彼ら自身に突きつけられるという構図を持っている。そのことはHodsonが、処女作から*The Inheritors*, *Pincher Martin*, *Free Fall*, そしてこの*The Spire*に至る彼の作